

# 太陽に祈りを

私は大磯に移り住んで太陽画家となつた。

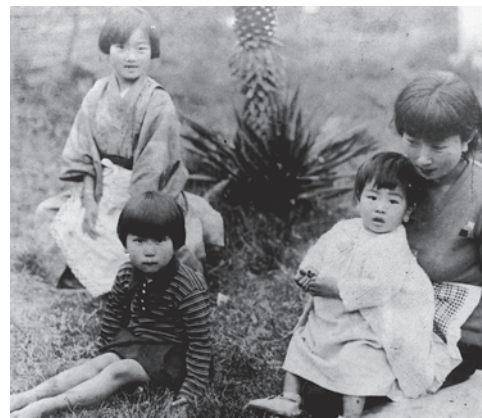
——「太陽賛歌」『花より花らしく』より

令和4年度新収蔵品を中心に、三岸節子の風景画家としての歩みをご紹介します。

## 好太郎の死と三人の子供たち

1934(昭和9)年の夫・好太郎の死後、節子は残された3人の子供を育てるために、挿絵や座談会、文章など、様々な仕事を貪欲にこなしました。「誠実に生きれば親子が生きていかれる一確信がありましたね。ですから、カット一つにしても、注文がくれば、一枚のカットに情熱を込めて描きました」>(\*1)そういった賃仕事の傍ら、絵は自分の描きたいもの、身の周りの室内のものばかりを描いていたといいます[No.3]。

やがて3人の子供がそれぞれ結婚し、「もうこれで母親の責任を果たした」(\*2)と感じた節子は、1957(昭和32)年、体調を崩したこともあり、静養も兼ねて軽井沢の山荘にこもり、外とのつながりを断ち切って、存分に制作に打ち込む生活を始めました。この頃には、孤独の中で自己の内面を見つめ、心の葛藤を浅間山に飛び交う鳥に重ねた「火の山にて飛ぶ鳥」シリーズ[No.6]などを残しています。



1932(昭和7)年頃、鷺宮の自宅の庭にて  
右から節子、長男・黄太郎、次女・杏子、長女・陽子



1970年代 大磯のアトリエにて

## 太陽賛歌

長男・黄太郎から「軽井沢の冬は寒いでしょう、それに暗いし。どこか明るい場所に移った方がよいのではないか」(\*3)とすすめられた節子は、1964(昭和39)年に神奈川県大磯町にアトリエを構えます。太平洋を望み、明るい日差しがふりそそぐ大磯のアトリエを節子は「太陽の家」(\*4)と呼び、野菜を育て、花を栽培する日々の中で、風景画に開眼していきます。この頃に生み出された「太陽」シリーズ[No.7,8,9]は、「太陽こそ生命。エネルギーの源泉。活力素。」(\*5)と語るように、太陽の生命力を画面に吹き込んだ「太陽賛歌」となっています。

## フランスへ そして再び大磯

風景画家として歩み始めた節子は、全国各地から好太郎の絵を買い集め、1967(昭和42)年に遺作220点を遺族4名とともに、好太郎の故郷である北海道に寄贈します。これにより、北海道立美術館が開館、後に開館する北海道立三岸好太郎美術館(1983・昭和58年開館)の基礎となります。

好太郎の名前がよみがえるのを見届けた節子は、1968(昭和43)年、本格的に風景画家としての道を歩む決意をし、異国の風景を求めて、黄太郎一家とともにフランスに渡ります。南仏カーニュに居を定めると、黄太郎の運転する車に乗り、南仏各地を見て回りました。さらに足を伸ばしたイタリア・ヴェネツィアの風景を気に入り、多くの優れた風景画を描きました[No.10,13]。1974(昭和49)年にパリでの個展「花とヴェネツィア」を成功させると、節子はフランス東部ブルゴーニュの静かな町・ヴェロンの田舎家を購入、アトリエに改築して、ここを拠点に、1989(平成元)年に帰国するまで、黄太郎とともにヨーロッパ各地を巡りました。

20年余りのフランス生活を終えた節子は、再び大磯に戻ります。最晩年に描かれた大作[No.20]は、アトリエの庭に咲く桜の花を描いたものです。「生命に執着し、執念を燃やす怖さが描けなければ、本当に桜を描いたことにはなりません。今の私になら描くことができます。美しさと怖さとを」>(\*6)



1968(昭和43)年頃、カーニュの丘を背景に  
右から節子、孫・太郎、長男・黄太郎、黄太郎の妻・繁子



1990年頃 大磯の庭にて

(\*1)林寛子・聞き書き『三岸節子 修羅の花』講談社、1989、p.132 (\*2)三岸節子「女流画家の血みどろの路」、『花より花らしく』求龍堂、1977、p.250 (\*3)鍵岡正謹「三岸節子とふたりのコウタロウ」、『没後10年記念 三岸節子展』朝日新聞社、2010、p.135 (\*4)三岸節子「太陽の家」、三岸(1977)、p.89 (\*5)三岸節子「太陽賛歌」、三岸(1977)、p.80 (\*6)吉武輝子「炎の画家 三岸節子」文藝春秋、1999、p.379